

本興寺だより

令和三年
十二月
第二十八号

「諸（もろもろ）のあらゆる功德（良い行いを修めて積み重ね、心が柔和で素直な人は皆、私（仏）がここに身を現わして教えを説いていることをはっきりとみる）とみることができ」（法華経 如来寿量品第十六）師走に入りました。年の瀬もまじかになり心もなんとなく気ぜわしく走り出す月です。

今年是一年遅れのオリンピックも無事終わり、衆議院の選挙もありました。コロナウイルスも変異株の続出で収束はおろか引き続きコロナ禍で年を終えます。人は誰もが同じ困難を体験すればさほど気になりませんが、自分だけが他人の経験しなない悩みを体験したとなるとストレスは増えるのです。コロナウイルスのように万人共通の試練は仕方がない割り切れませんが、個人の苦悩は他人が同じ悩みを持っていないと感じた時、深く傷つきなぜ自分が？と落ち込みます。人は顔も気持ちも能力も財力もみなそれぞれ違います。従って喜びも心配ことも違ってくるのが当たり前ですが、それがなかなか納得できず、つい他人と比べ

とで「茗荷」と名付けたのです。

余談ですが、赤塚不二夫の漫画「天才バカボン」に出でくる「レレレのおじさん」（町を掃除しながら声掛け運動をしているおじさん）のモデルが周利槃特だともいわれています。

掃除をして磨けば、目に見えるものは綺麗になり光沢が出てきます。同じように心の掃除をして塵や垢を落とせばその奥に宝石のように輝く尊い仏性があることに気付けるのだと。その仏性には人生を生き抜くあらゆる智慧と力が備わっているのだと。

仏様の内、特に菩薩（＝仏になるための修行をされている観音菩薩等）の方々は宝石で飾った宝冠や装飾品を付けておられます。

なぜ宝石を身につけておられるのか？仏様が宝石を纏っておられるのは単なるアクセサリーのためではなく、それぞれの宝石の持つ自然界のパワーを受けて人々を救うためであり、その多くの宝石が私たちのこころの奥にも宿っていることを教えているのです。

宝石の王様はダイヤモンドです。自然界で最高の硬度を持ち、美しい輝きのある光沢を放ちます。成分は炭素であり、地中深くで超高温と高压が加えられ生成されます。どの宝石も違いはあっても地中で強いエネルギーが加えられて出現します。

婚約指輪に宝石の代表であるダイヤモンドを送る



てしまうのです。

十二月は一年の総決算をする月です。今年一年を振り返り、嬉しかったこと、満足できたことであれ、また反対に悲しかったことや不満なことであれ、他人との比較の心を持たず、ともに冷静に見つめ直し、どちらも己の心持ち、行い、発する言葉の中に多くの原因があることに気付きなさいと云われます。

大晦日までに大掃除をするように、目に見えるほこりだけでなく、見えない心の垢、汚れも溜まっていることを知り、大掃除をすることが大切なのです。



お釈迦様の優れた十六人のお弟子（羅漢）の一人に「周利槃特」（しゅりはんどく）がいます。この人は物覚えが悪く自分の名前さえ忘れることがあったのですが、お釈迦様から一本のホウキと「塵を払わん、垢を除かん」の聖語を教えられ、毎日掃除しながらこの言葉を唱え、本当に大切なのは心の塵と垢であると知り、それを実践して悟りを開かれたのです。

その周利槃特が亡くなってお墓に生えた草を「茗荷（みよが）」と名付けたので、茗荷を食べると物忘れすると云われたのです。周利槃特は、名前を書いた板を背負っていたことから名を荷（にな）うということが多いのも、その固さから強い絆（きずな）を結び、ダイヤモンドのように永遠に輝く美しさと愛に満ちた家庭を築く誓いのためです。

またダイヤモンドは、己の輝きにも増して周囲を輝かせる力があります。夫は妻の、妻は夫の力が伸びるよう全力で支えますという意味もあります。

エメラルド、サファイアなど多くの宝石の周囲にダイヤモンドがちりばめられているのも、中心の宝石のパワーを引き立てる意味があります。

人間の心もその置き所によって誰からも愛され輝くダイヤモンドともなり、また見向きもされない炭素ともなります。仏の心を保つか鬼の心を現わすかで、同じ人でありながら。

その宝石（仏性）は周利槃特のように、周囲の人を輝かせる行い（掃除等）をする中で自分の本当の力、輝きが増してくると云われます。

今年の思い出は、除夜の鐘で突かれる百八の煩惱を除くように、心を感した煩惱を、全てかけがえのない思い出であり勉強になったと肯定的に受け止めて新たな年に向かいたいものです。

その気持ちと柔和で素直な心となり、私たちの側にいらっしゃるご神仏の存在に気付けることとなり、ご加護と功德を頂けることになるのだと云われています。本年も有り難うございました。

本興寺住職 中谷 聰 秀 合掌